

イメージ・メディア・アーカイヴ：南進・南向をめぐる 戦争記憶のリミックス

ードキュメンタリー映画の上映とシンポジウムー

歴史資料アーカイヴが身近になるにつれて、わたしたちの知らなかった数多くの歴史が立ち現れるようになった。アーカイヴは何を語り、何を語らないのか？わたしたちは歴史の何を問題にし、歴史とどのように対峙すべきか？「南進・南向をめぐる戦争の記憶」をキーワードに、ドキュメンタリー映画の上映とシンポジウムを通じて問いかける集会。

日時：2018年10月14日（日）10:00～（参加無料）

場所：関西大学千里山キャンパス以文館4Fセミナースペース

〈第Ⅰ部〉【研究集会】

10:00-10:10 趣旨説明

10:10-10:35 陳儒修（政治大学）

「從《南進台灣》到《軌道》的台灣想像（『南進台灣』から『軌道』へ到る台湾イメージ）」

10:35-11:00 孫松榮（台南芸術大学）

「南方熱・檔案惡：當代台灣影像藝術的幽幻史事（南方ブームとアーカイヴの罪：現代台湾の映像芸術にみえる幽霊的な歴史）」

11:00-11:25 菅原慶乃（関西大学）

「戦時日本の南方映画工作と台湾
：「大量の時代」における歴史研究の試み（戦時日本的南方電影工作於台灣
：在「大量時代」歷史研究的一個嘗試）」

11:25-11:50 張新民（大阪市立大学）

「日本軍政時期のシンガポール・マレーシア映画（日本軍政時期的新馬電影）」

11:50-12:40 休憩

12:40-13:40 【全体討論】 登壇者：邱坤良（台北芸術大学）、孫松榮（台南芸術大学）

陳儒修（政治大学）、王亜維（政治大学）

張新民（大阪市立大学）、菅原慶乃（関西大学）

〈第Ⅱ部〉【映画上映と監督トーク】

13:50 趣旨説明

13:50-15:50 『蟻の兵隊』上映

15:50-16:50 『緑の海平線』上映

16:50-17:20 池谷薫氏トーク

17:20-18:10 郭亮吟氏・藤田修平氏トーク

18:10-18:30 質疑応答

*第Ⅰ部・Ⅱ部ともに日中・中日逐次通訳あり

通訳者：南真理（大阪市立大学非常勤講師）、胡言（京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程）

*第Ⅰ部の資料として、会場で発言論文集（中文、日本語訳無）を配付する予定です。

＊上映作品紹介

『蟻の兵隊』（池谷薫監督、2006、英語字幕付）

「今も体内に残る無数の砲弾の破片。それは“戦後も戦った日本兵”という苦い記憶を奥村和一（おくむら・わいち）（80）に突き付ける。

かつて奥村が所属した部隊は、第2次世界大戦後も中国に残留し、中国の内戦を戦った。しかし、長い抑留生活を経て帰国した彼らを待っていたのは逃亡兵の扱いだった。世界の戦争史上類を見ないこの“売軍行為”を、日本政府は兵士たちが志願して勝手に戦争をつづけたと見なし黙殺したのだ。

「自分たちは、なぜ残留させられたのか？」真実を明らかにするために中国に向かった奥村に、心の中に閉じ込めてきたもう一つの記憶がよみがえる。終戦間近の昭和20年、奥村は“初年兵教育”の名の下に罪のない中国人を刺殺するよう命じられていた。やがて奥村の執念が戦後60年を過ぎて驚くべき残留の真相と戦争の実態を暴いていく。

これは、自身戦争の被害者でもあり加害者でもある奥村が、“日本軍山西省残留問題”の真相を解明しようと孤軍奮闘する姿を追った世界初のドキュメンタリーである。」

公式サイトより転載：<http://www.arinoheitai.com/index.html>

池谷薫氏（映画監督 / 甲南女子大学教授）

1958年、東京生まれ。同志社大学卒業後、数多くのテレビドキュメンタリーを演出する。劇場デビュー作となった『延安の娘』（02年）は文化大革命に翻弄された父娘の再会を描き、カルロヴィ・ヴァリ国際映画祭最優秀ドキュメンタリー映画賞ほか多数受賞。2作目の『蟻の兵隊』（06年）は「日本軍山西省残留問題」の真相に迫り記録的なロングランヒットとなる。3作目の『先祖になる』（12年）は東日本大震災からの復興を果たした木こりの老人を描き、ベルリン国際映画祭エキュメニカル賞、文化庁映画賞大賞を受賞。最新作の『ルンタ』（15年）では焼身抗議が続くチベット問題に切り込む。

『緑の地平線～台湾少年工の物語～』

（郭亮吟監督・藤田修平プロデューサー、2006、日本語字幕付）

「第二次世界大戦中に台湾から8000余名の少年たちが日本に派遣され、海軍工員として軍用機の生産に従事した。彼らは日本でどのような生活を贈り、戦争をどう捉えたのか、そして敗戦後、異なる社会や体制下でいかに生き抜いていったのか。「緑の地平線」は高齢に達した元少年工の記憶を辿りながら、公的な文書の残されることのなかった東アジアの歴史を記録したドキュメンタリーである。」

公式サイトより転載：<http://www.quietsummer.com/Emeraldhorizon/index.html>

郭亮吟氏（映画監督）

台湾の公共テレビでドキュメンタリー番組のディレクターを勤めた後、南カリフォルニア大学大学院に留学し、帰国後はフリーのディレクター、プロデューサーとして活動。「尋找1946消失的日本飛機」では新聞局第25回金穗賞最優秀ドキュメンタリーを受賞。藤田修平氏と共同監督した『湾生画家・立石鉄臣』（2016年）は同年の台湾国際ドキュメンタリー映画祭でプレミア上映された。

藤田修平氏（映画監督・プロデューサー、東京情報大学准教授）

京都大学で英文学を専攻後、南カリフォルニア大学大学院で映画製作を学ぶ。そこで知り合った台湾の同級生に招かれ、台湾でドキュメンタリー制作に関わる。台湾で制作した初めての長編映画「寧靜夏日」はフィラデルフィア映画祭や釜山国際映画祭などで上映された。